學界近況

○ユーベルエーヒ哲學史第四卷　即ち第十九世紀及ひ現代の部の新版(第十一版)が着いた。增補及び編輯者たるKonstantin Oestereich の序文の日附は昨年七月となつて居るが、出版は一九一六年である。通讀した譯でもなく、又は嚴密に通讀すべき性質の書でもないと思ふが、序文を一讀した上それを手引として重要と思はるゝ部分を拾ひ讀みした結果に依て簡單に紹介する。

先づ總頁數に於て一九〇六年の第十版よりも二百余頁を增して九百十頁の大册となつて居る。其内半以上は「第十九世紀初以來の獨逸哲學」であつて、而して其獨逸哲學の部が前版に於ては都合二章より成り、第一はカント以後ショーペンハウエル、ヘルバルト、ベネーケ等までを含み、第二はヘーゲル派の分裂以後現代までの凡ての哲學を含み「現代の哲學」と題せられて居るが、新版に於ては第一章は前同樣であるがヘーゲル派の分裂以後が二章に別れ、第一は「第十九世紀中期(一八三一—一八七〇)の哲學」第二は「哲學思想の再生(一八七〇年以後)」と題せられて居る。即ち獨逸哲學は新版に於ては三章に增した譯である。一九〇六年に出でた前版に於て一八三一年以後の凡ての哲學をば大づかみに「現代の哲學」中に包攝するといふことは單に年代の上より言ふも不精確の謗を免れぬと思ふが、哲學思想の内容より見れば更に不妥當なことであつて、此一點に依るも舊版が現代の新運動に對して公平なる理解と同情とを缺いで居るといふことを察するとが出來るが、新版には此缺點を補はんとする眞面目な企圖が充分に表はれて居る。即ち右の如き章數の增加と伴つて其「哲學思想の再生」の章に於ける現代哲學の叙說は殆んど全部改訂され、尙ほ以前の獨逸哲學の部に於て現代に至つて漸次重要な意義が發見されて來た思想家の叙說が著しく改訂增補されて居つて、獨逸哲學全部に亘つて頁數に於て三六〇より四八二に、節の數に於て四一より五三に增加して居る。

其第一章に於て新たに增補された重なるものはヰルヘルム・フォン・フムボールト、フリース、ボルツァーノの三節、第二章に於てストラウス、フォイエルバッハ、マルクス、エンゲルス、スティルネル、カール・クリスチャン・ブランク等に關する條、及びフェヒネル、ロッツェに關する二節は全然新たに書き改められて居る。併し最甚しく改訂された、或は改訂と言はんよりは寧ろ新たに書下された部分は第三章に於ける現代哲學の叙說である。即ち此部分は die Katholische Philosophie, die mit Lotze verwandte Denker, die theologische Systematik(是等も著しく改訂されて居るが)を除く外は全然新規に起草されたものである。中に就て、「新カント派及び新批判論」(此中には Helmholz, Lange に依て代表さるゝ physiologische Richtung, Liebmann, Volkelt に依て代表さるゝ metaphysische Richtung, Riehl, Külpe等に依て代表さるゝ realistische Richtung, Cohen, Natorp, Cassirer 等即ちマールブルグ派に依て代表さるゝ logistische Richtung, Windelband, Rickert, Münsterberg等に依て代表さるゝ werttheoretischer Kritiismus, Simmel に依て代表さるゝ relativistische Umbildung des Kritizismus 等

を含む)、フッサールの「純粹論理學及びフェノメノロギー」、リップスの「心理學と純粹論理學との結合」、マイノングの「對象說」(Gegenstandstheorie)、ニーッチェの「人文哲學」、ディルタイの「精神科學の哲學」、オイケンの「精神界の形而上學」等を互に關聯せしめて叙說したる部分には現代の新運動に對する筆者(オエステルライヒ)の廣き理解と同情とが表れて居つて、從來現代獨逸哲學の概觀としては不公平な而して散漫なジーペルトの著書の外に手輕な參考書を有つて居なかつた吾々に取ては極めて有益なものであると思ふ。

獨逸以外の諸國の哲學は其れ々々の國の知名の哲學者又は特に之に精しき寄稿者の手に成つたものであるから相當の價値ある者であらう。其中重な部分は佛、英、米、伊等であるが、最後の「亞細亞の哲學」といふ節は印度、支那、日本に關する簡單なる叙說より成り、日本の哲學の條(僅かに八行より成る)に於ては、スペンサー、ニーッチェ、ヘッケル等の歐洲思想の影響はあるが、併し近代に於て獨創の思想は未だ起らぬと說き、現代の日本に最顯著なる勢力を及ぼした思想家としては福澤諭吉氏一人が擧げられて居る。

最後に卷末にある「參考書目」も亦た著しく增加して居るが、これは「ビブリオグラフィー」が唯一の生命とまで言はれて居る本書の重寶の度を更に高めるものであらう。(朝永生)

◎リッケルト「認識の對象」(第三版) 主として第二版との異なる點を大體紹介して置かう。何人によつても豫期せられてゐたやうに第三版では彼れの論理主義が益ミ徹底して、一方に認識の心理的側面から遠かると共に、他方に其の實在的方面からも愈々離れてゐる。で、彼れは先づ認識論のとるべき二途を論じて、問題の取扱ひ方と研究の出發點とを定めやうとしたのが新しい點の一つである。

認識論の問題が認識の對象と、對象の認識とにあるとすれば、研究の方法にも二途あることは言ふまでもない。(この二途については彼れが嘗つて「カント研究」第十四卷に於て論じたのと少しも變つてゐない。)然し彼れは第二の途、即先驗論理學的、又は客觀的方向を取らずして依然認識主觀の攻究から發足して對象の本質に迫らうとする點に於て第二版と同一である。その理由としては、之れが初學者にとつて(本書は先驗的哲學の入門である)一層ちかしくあり、且事實上唯一の可能な方法であるからと言ふ。從つてその取扱ひ方から言つても根本的に見方を新しくしたものではないと思ふ。矢張り意識の概念を考査することによつて認識論的主觀を定め、之れに對立する超越的對象を求めんとするに於て同じである。(尤も個々の點に於て論證の精密になつたことや、材料の豐富になつたことはいなまれない。)從つて新しい點といへば既に從來彼れにあつた思想が更に的確に更に顯著に言ひ表はされたものにすぎない。そしてこの點が大體二つあることは彼れの言ふ所によつても明かである。

第一は認識の問題が專ら形式にあつて內容に非ることを一層明かにした點である。(これも「認識の二途」で可成詳しく述べられてゐる。)彼れは問題を形式に限ることによつて先づ特殊科學との別離を宣言し(十一頁—十二頁)次に內在論の立場に(形式の)新意義を與へて、實在論——即ち實在を二重化する模寫說を——論破

し(百二十三頁)第三章第二節に至り特に新しく「形式と內容」との關係を論じて、認識論に於ては單に形式の問題しか存在しないことを揚言し(百四十三頁)最後に所與性の範疇を述べて最も個體的なるものにも形式の缺くべからざることを痛論してゐる。(三百七十六頁)

第二に對象の概念の純粹になつた事である。詳しく言ふと、認識の對象としての不許不が更に徹底した「價値」の概念に推移した點である。即ち認識の對象と認識の作用とが嚴密に明別せられ、意味の概念が凡ゆる心理學的色調から擺脫した點である。第四章「客觀性の論證」に新しく設けられた數節は盡く之れを明かにするためである。不許不と價値との同一ならざる事(二百七十九頁)及び凡ゆる事實的是認と要求との作用から獨立してそれ自らに安住し妥當する價値をその純粹なる形に於て論ぜられたのは、吾々の最も注意すべき點であらう。然しながら、斯くの如き超越的價値も同時に事實的認識作用に交渉するものでなければならぬ。從つて第三版では超越的價値と判斷作用との仲介に任する內在的標準が新しい問題となつてゐる。第二版では之を判明性(エヴィデンツ)感情(ゲフュール)に求めたが、それでは單なる心理作用と誤解される慮があるから、內在的意味(インマネント)といふ言葉が用ゐられてゐる。(二百九十六頁)そして實在は說明せられ、價値は理解せらるべきものであるが、意味は指示すべき(Deuten)ものなることを說かれてゐる。更にこれ等の統一を最も直接なる Vorbegriffliche Erlebnis に求める點(三百一頁)に於てフッサールなどの考へと非常に近づいて來たやうに思はれる。(然し此等の考へも彼れが嘗て判斷と判斷作用」に於て論じた構想から一歩も進めて居ないやうである。)

以上の二の點—即認識の問題を形式に限つたことゝ價値の概念を純粹ならしめた事とは、要するに彼れの根本思想を更に徹したものに外ならない。(認識の二途を論じたのは其の準備にすぎぬ。序文に於て自ら言つてゐるやうにつまりは實在の領域を減少して非實在の世界を增大したのに外ならない(十頁)。詳しく言ふと一方に於て超越的實在を退け、他方に心理的存在を追ふて、論理的價値の世界を顯揚したのである。そして最後に價値の形而上學的實在化を駁することによつて價値そのものからも永久に實在的要素を奪ひ去つたのである。それ故に一般的傾向から言つて、カントから出た彼れの認識が漸次ボルツアーノの論理主義に接近せんとしつゝあることを見ることができる。そしてボルツアーノから發したフッサールなどが次第にカントに近きつゝあるのと面白い對照をなしてゐると思ふ。

第三版が全く新しく書き直されたもので或意味に於ては一の「新著」であると言ふ著者の眞意も恐らく上の點にあるのであらう根本的思想に至つては何等の差異をも見出すことができないし、又見出し得ない筈である。リッケルトの主張についてはいろ〳〵議論もあらうが、現代の哲學に於て最も注目すべき一學派の、最も留意せらるべき著者がその立場を更に明らかにした本書の如きは吾々にとつて一の大なる寄與であると言はねばなるまい。

(中川得立)

彙報

京都哲學會例會

三月十八日午後三時より文科第九教室にて開催左の講演があつた。

❶感覺と感想　　文學士　深田武君

『感覺と感情に就ては考ふべき問題多々在れど此處には感情を感情として感覺より區別する特徴は何であるかを攻究せんとするものである、扨て意識が種々の要素より成立しておると見る觀方は今日一般に承認せられて居る樣であるが、かくの如き要素の數に關しては學者各其の觀る處を異にしてる而し少くとも感情と感覺とを區別し得る事は Külpe の說く處に依つて明白である』云々として、Külpe の說をひき、然らば此くの如き要素としての感情と感覺との間に如何なる特質の相異が存するかと言ふに、此れに關しては Titchener の說く處最興味あり、とて同氏の說をひき簡單に其各を論評した。

心理學讀書會

三月二十五日午後一時より實驗室に於て開催左の講演があつた

❷相關係數としての Pearson氏の Product-moment formula に就て　　岩井勝二郎君

❸無意識に就て　　田村惠寛君

岩井君は『相關係數として從來最廣く採用せらるゝものは $r=\frac{s(xy)}{N\sigma_1\sigma_2}$ なる形を有し A. Bravais氏の始めて示唆したる所に基いて1896年 Karl Pearson氏が其の相關係數として甚だ優秀なるものなる事を明かにし且つ此れに Product-moment formula の名稱を與へたり』とて先づ其の數學的理論に關し Brown氏が Pearson氏自身の講義に依りて記載せる所を紹介し尋て Thorndike氏が此の係數を以て、心理學的領域に於ける相關の研究上必須なる諸種の性質をも具備すと言つた意味を說明した。

田村君のは Morton Prince 氏の著書 "The Unconscious" The Fundamental of Human Personality normal and abnormal, 1914 の大要紹介であつて、先づ副意識研究の重要なる事より說き始め副意識の存在を肯定せしむる樣な諸々の面白き實驗實例を示し、最後に普通意識即ち Personal consciousness 並に、副意識の根底として無意識の存在を認め、つまる處、無意識は abnormal Personality の狀態に於ては副意識として表はれ normal Personality の狀態に於ては Personal Consciousness として表はるゝものであると論結した。

教育學會例會

三月十七日午後六時より、大學本部小會議室に於て開催左の講演があつた。

○學制問題に就て　　京都府立第一中學長　理學士　森外三郎君

○農村問題を論じて其數育問題に及ぶ　　末永惣太郎君